＜論文＞

現代日本語文学作品に見られる引用辞トテの用法

髙　谷　由　貴
東亜大学　人間科学部　国際交流学科
takayayuki@toua-u.ac.jp

《要　旨》

現代日本語におけるトテについて，形態的特徴と意味の分析を行う。引用複合辞トテは，現代語においては「ッテ」という新たな形式に変化したとされるが，トテが完全に消失したわけではなく，現在でも使用されることはあり得る。本論は現代語におけるトテの意味と，「古語性（森脇 1995a：14）」について次の二点を述べる。一点目は，現代日本語の小説に使用されるトテは本来の引用の意味では殆ど使用されず，その一方で取り立て詞ダッテに相当する使用が多く見られることである。もう一点として，トテが使用される小説の題名・副題を示し，時代小説・歴史小説が含まれることを示す。

キーワード：取り立て詞，引用，トテ，コーパス

《目　次》

1.　はじめに
2.　先行研究と問題の所在
　2.1.　現代語におけるトテの先行研究と問題の所在
　　2.1.1　引用助詞のトテ
　　2.1.2　引用以外のトテ
　　2.1.3　取り立て詞「ダッテ」に相当するトテ
　2.2.　残された問題
3.　分析基準の検討
　3.1.　用言を承けるトテ
　3.2.　体言を承けるトテ
4.　用例数
　4.1.　体言を承けるトテ
　4.2.　用言を承けるトテ
　4.3.　トテが使用される作品
5.　おわりに
6.　参考文献

1. はじめに

本稿では，主に古典語における引用形式として分析されてきたトテが，現代日本語において使用される場合，どのような意味的また文体的特徴を持つかについて述べたものである。引用複合辞トテは，現代語においては「ッテ」という新たな形式に変化したとされるが，書き言葉においてはトテという形式も使用される。現代日本文学においては，本来の引用の意味では殆ど使用されず，その一方，取り立て詞ダッテに相当する使用が多く見られる。また，小説の題名・著者・ジャンルから，時代小説・歴史小説に使用されることが多いことについても指摘する。

(1)　「この砂時計の砂が落ちきったら，それで〆ッてわけで。だいたい，十分がとこでしょうか。」「よし，皆ども，進軍ぞ！」と，旦那の雄々しい喚呼に，傾城衆，声をそろえて，「あい！」とて，迷路へふみ入った。そもそもが花魁の外出といっても，よくッて芝居見物，花見といえば，廓内，大門から水道尻まで，毎年植わる植えこみを，格子ごしにのぞくがせいぜいだから…
（物集高音／『大東京三十五区冥都七事件』／2001／PB49_00754　20120）

(1) は物語の地の文の一部で，発話とともに，迷路へ踏み入ったという動作が描写されている。このよう発話・思考の引用句を前接部分に持ち，後節部分にそれと並行する述部を持つ引用のトテは，現代語においても時代小説等に見られる。一方で，会話では用いられることは少なく，専ら書き言葉において見られる（丹羽2006）とされている。本稿では，引用とその他のトテの書き言葉における使用状況を観察するため，『現代日本語書き言葉均衡コーパス』における文学のデータを観察した。その結果，現代語の文学においては引用よりもむしろ取り立て助詞として使用されているということが判明した。

(2)　バスの車掌に「此度降りるよ」と呶鳴る紳士があるが，女車掌を下婢のように扱う態度には感心しない。「此度降りますよ」といったとて沽券にかかわることもないと思う。けれどまた円タクの運転手の中には，此方で丁寧な言葉で話しても，運転手の方は甚だゾンザイな言葉で応答するのがかなり多い。
（正木ひろし／『歴史近きより』／1991／LBf2_00035　48510）

(2) は，「此度降りますよ」と言ったとしても沽券に関わることはないという意見を述べており仮定逆接の意味で使用されている。

(3)　「ご存じだったのですか」千歳が意外そうに見た。「お須磨の方さまとて人の親，わが子を世継ぎにしたいと願うのは，むしろ当然のことでしょう」
（黒崎裕一郎／『密殺　冥府の刺客』／2001／PB19_00096　29960）

(3) は「お須磨の方さま」という人物も人の親であるという意味で使用されており，現代語の「取り立て詞」ダッテに相当する意味で使用されている。

(4)　ところで蕭白どのはつねづねおおっぴらに，「画を望まばわたしに乞え。絵図をもとめるつもりなら，円山主水がよろしかろう」と吹聴しておられまする。もとより　何かにつけて口の悪いお方のことととて，人によっては羽振りのよい同輩へのみぐるしい嫉視のようにみなす向きもまんざらないとは申せませぬ。しかし主水さまの写生という主張の裏がわに匿されている意外に中身のない一面を，あのお方特有のするどい勘でつとに見やぶっておらるるのではござりますまいか。
（宮本徳蔵／『敵役』／2004／PB49_00754　11760）

（4）は「口の悪いお方」であることが「羽振りのよい同輩へのみぐるしい嫉視」と見なされる原因となっていると発言している場面である。

（1）のような引用と，その他の（2）～（4）のような用法の使用状況を確認するため，文芸作品におけるトテの使用をまとめ，その傾向を述べる。

さらに，トテには現代語において使用される際，「古語性」を帯びるという先行研究での指摘がある（森脇 1995a）。これについても，「古語性」がどのような特徴を指すのか明らかになっていないという問題がある。

これらの問題に対して本論は，現代日本語におけるトテについて二点を述べることを目的とする。

まず，トテを前接語の形態により分類した上で意味を記述する。文学作品にて使用される以下の四種類の意味を確認し，その中でも仮定逆接・取り立て詞ダッテ相当の使用の多さを特徴として指摘する。

a）引用：引用構文第Ⅰ・Ⅱ類
　Ⅰ　－述部が引用句の発言・思考と事実上等しい動作・状態を表す。
　Ⅱ　－述部が引用句の発言・思考と共存する動作・状態を表す。（藤田 2000：31）

b）仮定逆接：前接部の値が仮に変化したとしても，結果は変化しないという譲歩の意味を持つ。（2）

c）取り立て：現代語の「取り立て詞」ダッテに相当し類例が示される。（3）

d）理由：前節部分と後節部分が原因－結果の関係である。（4）

以上の意味的特徴の指摘に加えて，トテは，現代日本文学のなかでは歴史小説・時代小説に多く使用例が見られることを述べる。

まず，次節では先行研究の議論をまとめる。3. で分析基準について，4. で調査結果について述べ，5. でまとめを行う。

2.　先行研究と問題の所在

本節では引用の形式の意味変化について先行研究の議論を概観し，残された問題について述べる。先行研究において，その多くは中古以降のトテの意味記述の際に現代語の使用についても触れている。

2.1. 現代語におけるトテの先行研究と問題の所在

トテの由来及び観察される時代について，先行研究では此島（1973），小田（2015）らが，トテは引用の「ト」に接続助詞「テ」が付いた語であり，言葉を引用し次の動作を展開する関係を表すとしている。トテという形式が，いつから見られるかについては，助詞の用法をまとめた内尾（1973）にて「平安時代から江戸時代にまで」見ることができるとしており，現代語でも使用されるという記述は見られない。森脇（1995a）は，現代語において用いられることはあるものの，使用は少なく特殊であるとしている。以下では主に中古語におけるトテに言及している先行研究，丹羽（2006），小田（2015）に注目し，関連する部分をまとめる。

2.1.1 引用助詞のトテ

トテの意味を広く記述した辞書，文法書において，最も基本的とされる意味は，引用である。小学館（2002）刊行の『日本国語大辞典第二版』において「文または文相当の語句をうけ，「…と言って」「…と思って」の意を表わす。この場合の「て」はきわめて軽く，文法的機能は「と」だけの場合とほとんど変わらない」としている。

また，小田（2015）は，中古語におけるトテについて，「と言ひて」「と思ひて」と同じ意味を持つものとしており，丹羽（2006）も発言内容を引用するものとしている。

以下丹羽（2006：260-261）の用例（（5）～（7）は岩波書店『日本古典文学大系』による）を挙げる。（5）（6）は引用とされた例で，（5）は「これまゐらせ給へ」という台詞の後に，

「御硯などさしいる」という動作が行われたことを示す。(6) は「…女もしてみむ」という思考の内容に続き，動作が続いており，発話あるいは思考の内容を引用しているとしている。

(5)　「これまゐらせ給へ」とて，御硯などさしいる。　（「枕草子」）
(6)　をとこもすなる日記といふものを女もしてみむとてするなり。　（「土左日記」）

次に，発言内容ではなく，名前を引くトテについても丹羽（2006：260-261）で言及されており，連体節中に見られるとされている。(7) は，固有名詞「具覚房」を表示した後，それと同等の概念である「なまめきたる遁世の僧」を並列している。

(7)　「京に，具覚房とて，なまめきたる遁世の僧を，こじうとなりければ，常に申し睦びけり」　（「徒然草」八十七段）

これについては現代語でも，固有名詞とそれと対応する意味を持つ名詞句を並列させる「といって」が見られるとしている。

(8)　あの人は山田さんといって，この町の町内会長です。

このように丹羽（2006）は，発話と行為を並列し引用する用法に加え，固有名詞とその意味対応する名詞句とを並列するトテについて指摘している。

2.1.2 引用以外のトテ

2.1.1 では，トテの基本的な意味が引用とされることを述べた。その一方で，丹羽（2006），小田（2015），辻本（2016）は，引用以外の用法についても指摘している。

小田（2015）は「前件と反する内容の後件」という解釈となるものを逆接としている。

(9) は，前件を認めた上でそれに反する事柄が成り立つ，逆接のトテであると述べている。現代語訳では「…毎年同じようにして咲くからと言って，桜を並一通りに思う人がいるだろうか。（新編日本古典文学全集［18］枕草子 P.90）」とされている。

(9)　さて春ごとに咲くとて，桜をよろしう思ふ人やはある。　（「枕草子」）

続いて小田（2015）は中古語における例をさらに挙げており，(10) を仮定逆接のトテであるとしている（p.473）。(10) では，完了の助動詞「ぬ」を受けて，前件で未成立の事柄を条件として仮定し，後件で話し手の意見を述べているものである。現代語訳は，「私が亡くなったからとて，不本意に志を捨てることがあってはならぬ」（新編日本古典文学全集［20］源氏物語（1）桐壺 p.30）となっている。

(10)　我亡くなりぬとて，口惜しう思ひくづおるな。　（源氏物語・桐壺）

中古語に見られた (9) のようなトテは，現代語の文学作品には見られない。一方，(10) のように完了の助動詞を伴い「仮定逆接」を導くトテは見られる（3. 節で後述）。

丹羽（2006）は「存在するはずものがない」ことを意味するトテを「逆接」であるとしているが，これについては次節の「取り立て詞」に相当するトテであると思われる。以下は丹羽（2006）が挙げた浄瑠璃における例である。(11) (12) について「逆接の「とて（も／は）」に非存在の述語が来るもの」としており「居る間」「春」という言葉を引用し，その言葉で表されるものが「普通はある筈なのに，この文脈では存在しない（p.261）」ことを表すとしている。

(11)　正真の貧乏隙なし。……。なんじゃし只居る間とてなく御無沙汰とこそ語りけれ
（「五十年忌歌念仏」『近松浄瑠璃集』）
(12)　師走の果てに此の如く。諸勧進諸承認春とてもないこと。
（「冥土の飛脚」下）

2.1.3 取り立て詞「ダッテ」に相当するトテ

以上で，トテには，引用助詞としての使用と，『日本国語大辞典第二版』（小学館 2002）においては，「…だって」「…もやはり」の意を表わすとして以下の例が挙げられている。以下の（13）では，「民子だってそのようには思っていなかった」という意味となる。ダッテは「取り立て詞」の一つとして分析されている。（用語は蓮沼（1997）にならい「取り立て詞」とする）。

（13）「これが生涯の別れにならうとは，僕は勿論民子とて，よもやそうは思はなかったらう」
（伊藤左千夫 『野菊の墓』1906）

2.2. 残された問題

ここまで，トテについての先行研究を概観してきた。

トテは引用を意味の基本としながらも，それ以外の意味で使用され得るという点では一致した見解が示されている。しかしながら，取り立て詞「だって」に相当するトテへの言及が辞書以外にあまり見られず，「引用」「逆接」といった他の意味との関係も定かではないことなど，残された問題も見られる。それぞれの特徴をより明確にし，引用のトテが接続助詞や取り立て詞として用いられるようになった経緯を考察する必要があると考えられる。

これらの問題を踏まえ，次の3.節「分析基準」では，引用，取り立て詞等の先行研究を参照し，基準を立て4節で調査を行う。

その結果，現代語では，引用として使用されるトテは少なく，仮定逆接条件を示すトテ，および「取り立て詞」相当のトテが多く見られることを指摘する。また，現代語で使用されるトテが，「古語性」（森脇 1995a：14）を持つとされることについても，コーパスのデータの書誌情報を観察することで，歴史小説・時代小説にてトテが使用されていることを報告する。

3. 分析基準の検討

先行研究を鑑みると，トテの意味と前接部の形式には相関が見られることが予想される。引用は主に文相当の語句にトテが続くと考えられるので，前接語にも用言を取る蓋然性が高いと考えられる。また，仮定逆接を表す場合，完了形との共起関係が見られることから前接語はやはり用言であると予想される。「取り立て詞」ダッテに相当するトテについては，ダッテの形態的特徴である，名詞（＋格助詞）を受けて後続の述語との譲歩的関係を表すという特徴に注目する（蓮沼 1997・2003）。

このような「取り立て詞」のダッテと同様の特徴を持つと仮定すれば，「取り立て詞」相当のトテもまた，名詞あるいは名詞と断定の助動詞ダに承接すると考えられる。以上の仮定から，予想される意味と形態の関係を表1にまとめた。

表1　予想される前接語と意味の相関関係

前接語	意味	意味内容	例文番号
用言	引用	前接部が発話・思考内容の引用句を表示し、述部が同時並行の動作／状態を表す	1
用言	仮定逆接	前接部の値が仮に変化したとしても、結果は変化しないという譲歩の意味を持つ	2
体言	取り立て	現代語の「取り立て詞」ダッテに相当し類例が示される	3
体言	理由	前接部の内容が述部の内容の原因・理由を示す	4

3.1. 用言を承けるトテ

本稿では，引用のトテとそれ以外のトテとの峻別を行うため藤田（2000）を参考にした。引用構文に関して藤田（2000）は，述部の特徴からⅠ型・Ⅱ型に大きく分類している。それによると，Ⅰ・Ⅱ型はそれぞれ以下のように定義されている。

（14）　Ⅰ－述部が引用句の発言・思考と事実

上等しい動作・状態を表す。

Ⅱ－述部が引用句の発言・思考と共存する動作・状態を表す。（藤田 2000：31）

先行研究による引用の定義を参考にすると，引用は，発話・思考と同時に，その発話者の動作が生じるものと考えられる。本論文では，このⅠ・Ⅱを合わせてa）トテの「引用」としたが，結論を先取りして述べれば，引用Ⅰのトテは現代語には見られなかった。引用Ⅱの例を挙げる。

（15） お国が赤塚村に輿入れする時も，ここに寄って休息し，支度がえしたが，その後おりおり里がえりする時も，行きかえりには必ず立寄って休息することにしている。つい二十三日前，潮崎に行くとて立寄ったお国が，子供も連れずただ一人来たので，長右衛門の女房がびっくりして飛び出して来た。

（海音寺潮五郎／『二本の銀杏』／2002／LBm9_00058　16630）

（15）は，「引用」の例である。「潮崎に行く」という引用句があり，その後の述部の「立寄った」という動作がその内容と共存している。

用言の場合のみに見られる意味用法として，前接語に完了形の助動詞を伴い，仮定逆接条件の意味で使用される場合がある。

（16） 乱破で，あの左甚五郎の手下であったのを知る者は屋敷内でも少ないはずだ。いや，たとえ聞かされたとて信じないだろう。どこから見ても武家の娘としか思えない。

（髙橋克彦／『鬼九郎五結鬼灯』／2001／PB19_00328　7960）

（16）は，たとえ聞かされたとしても間に合わないと述べる場面であり，「仮定逆接」を意味する。

3.2. 体言を承けるトテ

続いて以下（17）に「理由」の用例を挙げる。

（17） 近頃では女ばかりか男も髷を切り離されるという」 塚田は，仙太郎の眼を見据えた。「これを取り押さえれば，名が出る。たとえ柳剛流破門の身といえども，御取立ての筋があるかもしれぬぞ」「左様なものでございますか」仙太郎は興味無さそうに答えた。髪切り魔の事は，近所のことて彼も耳にしていたが春以来，ぴたりと噂が絶えている。

（東郷隆／『代表作時代小説』／2003／PB39_00132　26740）

（17）の例は「近所のこと」と「彼も耳にしていた」の間に論理的な関連が見られ，前節部分が後節部分の原因・理由となっている。このような例を「理由」とした。

（18） …頼綱はふたたび日蓮と向き合った。「我らとて決して法華経がいかぬと申しておるのではない。そなたが作りし経分ではない。元からあるもの」頼綱は笑いを交えて切り出した。「しかし、他宗をすべて認めぬのはいかがなものか。他宗が法華経を弾劾したと言うのであればそなたの憤慨も分かるが、そうではなかろう。法華経を大事に修蔵している寺もある。そなた一人が皆に喧嘩を売っているようなものではないか。今後はそこを考えて貰いたい。そなたさえ心を穏やかにしてくれれば幕府とてそれなりの優遇をいたす」「優遇とは？」日蓮は頼綱を静かに見やった。「しかるべき寺を与え，そなたを別当に任じてもよい。その寺を大きくできるかどうかはそなた次第。我らは口出しせぬ」

（髙橋克彦／『火怨北の燿星アテルイ』／2002／LBr9_00186　12230）

（18）は，頼綱という人物から日蓮という人物

に対し，「そなた」（日蓮）が心を穏やかにすれば，幕府も優遇すると述べている。このような例を，取り立て詞ダッテに相当する意味を有しているとして，「取り立て」とする。

以上で，体言を承けるトテ，用言を承けるトテ，それぞれを区別する基準を述べた。

4.　用例数

国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』を使用し，「出版・書籍」を対象として「キー」の「語彙素」を「とて」に設定し検索を行い，333例を抽出した。その後，ジャンルが「日本文学」の「小説」であるもの147例の内，近代文学全集等，調査目的に合致しない例を目視にて除き，122例を調査対象とする。

調査対象とする全用例の数を表2に示す。名詞・代名詞・助動詞が前接する例が高い割合であることがわかる。次節より，トテの前接語が体言／用言の場合に分けて述べる。

表2　BCCWJ小説におけるトテの前接語[*1]

品詞	用例	%
名詞	71	58.2%
代名詞	15	12.3%
動詞	2	1.6%
形容詞	1	0.8%
助動詞	32	26.2%
助詞	1	0.8%
	122	100.0%

4.1. 体言を承けるトテ

体言を承けるトテの意味を表3にまとめた。

表3　体言を承けるトテの意味

取り立て	79
理由	5
資格	2
合計	86

最も多く見られたのは取り立ての79例であり，その他，理由・資格としてそれ以外の意味での使用も見られた。

（19）　小松ははじかれて転倒するだろう。集団での転倒事故は，間違いなく大惨事になる。もちろん，響木とて巻き添えを食うことは避けられない。その恐ろしさを知っている響木の背筋に悪寒が走った。
（斎藤純／『銀輪の覇者』／2004／PB49_00364　90690）

（19）は人物の名前である「響木」がトテに前接する。その人物も，他の者と同様に巻き添えを食うという「同類」の意味で使用されており，ダッテに相当すると言える。続いて以下に「理由」の例を挙げる。

（20）　温厚な琢舟どのはこの不意うちにややひるんだかに見うけられましたが，さすがに満座のなかとて一歩もひけず，「何と仰せらるる。あれは探幽先生の模本にもとづいて製したものです」と軽く反論なされました。
（宮本徳蔵／『敵役』／2004／PB49_00754　29260）

（20）は満座の中であるから，一歩も引くことができないという，理由を意味する例である。5例中3例が，トテに形式名詞「こと」が前接する例であった。

（21）　十三貫（約四十八瓩）の小兵だから，尻がかるいも道理で。それをさいわい，雑誌の種とり記者とて，市井の奇事異聞をものしては，いくばくかの稿料をうる。
（物集高音／『大東京三十五区冥都七事件』／2001／PB19_00486　15570）

わずかに2例，いずれも同じ著者による作品の例であるが，（21）は「資格」とした例である。職業名である名詞句「雑誌の種とり記者」が前接しており，記者として仕事をしているという意味で用いられている。

4.2. 用言を承けるトテ

用言を前接するトテの意味を表4にまとめた。

表4　用言を承けるトテの意味

仮定逆接	23
取り立て	8
引用第Ⅱ類	5
合計	36

用言を前接するトテは36例見られ，仮定逆接を意味するトテが23例，「取り立て詞」ダッテ相当が8例，そして引用が5例である。まず「引用」の例から確認する。

（22）　石段の上り口には甘酒茶屋もある。べつに甘酒を舐めるつもりもないが，木陰にはいって一息入れようとて，稲を誘い，二人して茂みの下にはいって腰を下ろしたところだ。
（西村望『風の大菩薩峠　文政わけあり道中』／2003／PB39_00273　2030）

（22）は，「木陰にはいって一息入れよう」という思考内容の引用句を前接したトテの例である。上のような「引用第Ⅱ類」のトテが5例観察されたが，全体としては多数ではなく，「仮定逆接」が23例と，最も多く，次いで「取り立て」が8例である。

続いて取り立ての例を見てみよう。この2例は，断定の助動詞タリとともに使用されている。

（23）　阿弖流為は誇らしげに宣告した。「この二十二年の間，我ら蝦夷軍は一度たりとて敵に敗れはしなかった。それゆえにこそ敵は我らを恐れ，和賀や志和の仲間らを受け入れたのだ。
（高橋克彦／『火怨　北の燿星アテルイ』／2002／PB29_00064　32340）

（24）　日本企業がアメリカの映画会社を買収し，財閥の株の過半数を取得したというのもつい先日のことである。自分自身は奉仕産業から零れ落ちたが，精神はまだ一段たりとて落ちてはいないという自負が，宇多川にはあった。
（坪井雲／『坂道の果実』／2003／PB39_00347　17300）

（23）は，これまで一度も負けたことがないと述べる際に「一度たりとて」が使用されている。（24）も，精神は一段も落ちていないという意味である。

このように，用言を承けるもののうち，「取り立て」とした例については，否定辞を伴うという共通点がある。今回の調査では，タリトテという形式のみが観察されたが，これについてはさらに歴史的資料を調査する必要がある。今後の課題としたい。

ここまでBCCWJにおけるトテについて，その4種類の使用があることを確認した。トテは同時並行的動作を後接する引用が本来の本来の用法であるが，BCCWJにおけるトテについては，類例が明示される場合が引用よりも多く観察される。

4.3. トテが使用される作品

トテの使用は，BCCWJの用例を観察すると，近代以前の時代設定における物語においてしばしば使用されることが分かる。以下に取り立ての用例を再掲する。

（25）　どうして可汗の檜と松のように成長した弟たちをこのように虐げるのですが。いかに可汗とて寄る年波には勝てません。行く末年老いて，可汗の御身体にもしものことがあった場合…
（森村誠一／『地果て海尽きるまで』／2005／PB59_00076　18430）

（25）は2005年に出版された歴史小説の会話で，成吉思汗の妻が夫に語りかける場面である。このように，トテは文学作品の中で，時代小説であることが確認できる例が確認される。表5には，トテが見られた65作品の書名と副

表5　文学作品の書名と副題

副題あり・26作品		副題無し・39作品	
「土佐二十四万石」を築いた夫婦の物語	西方遊撃記	ヤーンの朝	天と地の娘
山内一豊と妻千代	めざめよ運命の環	暗殺者	天馬、翔ける
SFファンタジー	探偵小説	陰陽師阿倍晴明	天保山夢の川さらえ
埴輪の故郷	大東京三十五区冥都七事件	永い夜の終わり	天保枕絵秘聞
パノラマ座の惨劇	長編時代小説	王朝の挽歌	薄曇りの肖像
帝都探偵物語	川柳侍	黄金の輝きを！	卑弥呼の殺人
現代京ことば訳	長編推理小説	火天の城	風の陣
源氏物語	三毛猫ホームズの仮面劇場	鬼九郎五結鬼灯	風刺文学集
罪なき者、石をもて…	長編伝奇小説	吸血鬼のおしごと	乱世幻記
わが愛はやまず	陰陽師鬼一法眼	宮尾本平家物語	陸奥甲冑記
三国志異聞	武争篇	銀の戦士	龍馬
中国遊侠伝	央華封神	銀輪の覇者	薔薇のマリア
秀吉に喧嘩を売った男・九戸政実	文政わけあり道中	見えない橋	覘き小平次
天を衝く	風の大菩薩峠	源九郎義経	
秋田県仙北郡生保内村字田向の伝説	北の燿星アテルイ	御町見役うずら伝右衛門	
雪原の夢	火怨	紅の袖	
書下し超伝奇巨篇	本朝妖怪盛衰録	刻謎宮	
陰陽魔界伝	豆腐小僧双六道中ふりだし	坂道の果実	
書下ろし歴史仮想戦記　大乱の兆し	流血女神伝	時宗	
上杉覇龍伝	砂の覇王	水滸伝	
小説	龍（信長）虎（信玄）飛翔す！	双頭の鷲	
道元	電撃・桶狭間	太陽と月のカタチ	
小説チンギス汗	冷凍人間	退魔拳士フェイラン	
地果て海尽きるまで	鮎川哲也名作選	代表作時代小説	
少年陰陽師	六歌仙の暗号	脱北作戦	
異邦の影を探しだせ	QED	敵役	

題を全て挙げた。題名及び，副題の含まれる26作品については，現代社会を舞台としているものは2作品（『わが愛はやまず』『三毛猫ホームズの仮面劇場』）であり，その他の24作品は時代小説・歴史小説・そしてそれらの要素を含むファンタジー作品である。

以上，「引用」の使用例は少なく，「取り立て」について多く観察されること，歴史小説・時代小説においてしばしば使用されることを述べた。

5.　おわりに

本稿では，現代語では使用があまり見られないとされる引用複合辞トテについて，コーパスに見られる引用以外の用法も含めて記述し，「引用」「仮定逆接」「理由」「取り立て」の4種の用法が見られることを確認した。

BCCWJ「文学」のジャンルのトテを調査し，本来の引用用法以外の用法が多く見られ，とくに「取り立て」の用例が多く観察されることを述べた。取り立ての中には，体言を承けるもの

が多いが，助動詞タリを伴う文語的な表現も見られる。

また，トテが使用される際には，「古語性」が見られるという先行研究の指摘に対して，トテが使用される作品名と副題を観察することで，歴史小説・時代小説において用いられていることを示し，古い印象を与える要因であるという可能性を提示した。

今後は，「取り立て」がどのような過程を経て多く使用される様になったかについて，国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』を利用し調査をさらに進めたい。

注

*1　複数性・助数詞等を意味する接尾辞を含む語「我ら」等も代名詞に含む。

参考文献

小田勝（2015）『実例詳解　古典文法総覧』和泉書院

加藤陽子（2010）『話し言葉における引用表現　引用標識に注目して』くろしお出版

金沢裕之（1998）『近代大阪語変遷の研究』和泉書院

此島正年（1966）『国語助詞の研究：助詞史素描』増訂版桜楓社（再版 1994）おうふう

辻本桜介（2016）「主節主体の動きを表す動詞終止形に接続するトテについて―引用と異なる機能の分析―」『日本語の研究』12（2）pp.35-51，日本語学会

丹羽哲也（2006）『日本語の題目文』和泉書院

蓮沼昭子 (1995)「談話接続語『だって』について」『姫路獨協大学外国語学部紀要』第 8 号，pp.265-281. 姫路獨協大学外国語学部

蓮沼昭子（1997）「「だって」と「でも」―取り立てと接続の相関―」『姫路獨協大学外国語学部紀要』(10) pp.197-217，姫路獨協大学外国語学部

蓮沼昭子（2003）「取り立て詞「だって」について」『姫路獨協大学外国語学部紀要』(16) pp.251-268，姫路獨協大学外国語学部

藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院.

森脇茂秀（1995a）「助辞「とて」の成立過程・意味用法をめぐって（一）」『別府大学紀要』(36)，pp.14-25，別府大学会

森脇茂秀（1995b）「助辞「とて」の成立過程・意味用法をめぐって（二）」『山口国文』（18)，pp.69-82，山口大学 .

湯澤幸吉郎（1982）『徳川時代言語の研究 』風間書房.

電子化資料・コーパス

ジャパンナレッジ HP　http://www.japanknowledge.com/koten/displaymain，『新編日本古典文学全集』，小学館（2019 年 11 月 30 日確認）

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/，（2019 年 11 月 30 日確認）

辞書・辞典類

日本国語大辞典第二版編集委員会（編）(2000-2002)『日本国語大辞典第二版』小学館

（付記）

本稿は，2018 年に W. H. ヤコブセン先生講演会＋研究会（2 月 16 日，大阪大学箕面キャンパス）にて発表した内容に修正を加えまとめたものです。発表や査読に際し貴重な御意見を下さった先生方に御礼申し上げます。

Usages of *Tote* in modern Japanese literature

Yuki TAKAYA
Department of International Studies, Faculty of Human Sciences, University of East Asia
takayayuki@toua-u.ac.jp

Abstract:

This paper analyzes the morphological characteristics and meaning of *Tote* in contemporary Japanese literature. It is the general understanding of *Tote* that it had changed the form of *Tte* in modern Japanese. However, *Tote* was not completely lost and could still be used today. In this paper, the following two points are described. The first point is that *Tote* is rarely used in its original quoting sense. On the other hand, there are many uses corresponding to *Datte, toritate* (paradigmatic focusing). The second point is that age and history novels are included in the title/subtitle of the novel in which *Tote* is used.

Key words: *toritate* (paradigmatic focusing), quotative function, *Tote*, corpus